
ハヤテのごとく！SS『はやてのごとく！』

らんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！SS『はやてのごとく！』

【Nコード】

N1952G

【作者名】

らんぐり

【あらすじ】

僕は高校生執事、綾崎ハヤテ。ある日僕は、黒づくめの男に変なクスリを飲まされ、たわけではないがなぜか体が縮んでしまった！見た目は子供、心は執事！その名は（※このあらすじは本編の内容を微妙に誤解させる内容を含んでいます）

『はてのいんどく!』前編(前書き)

シヨタ注意(えー)

『はやてのゝとく!』前編

「ナギ、ナーギ! いい加減起きなさい!」

「んあ……?」

まどろみの向こうから聞こえる呼び声に間の抜けた返事で応えながら、三千院ナギは目を覚ます。

見慣れたベッドの天蓋。少し視線を横に向けると、眉を寄せてナギを見下ろすマリアがいた。

「あー、おはようマリア……。そしておやすみ」

「こら、これで何度寝だと思ってるんですか。早く起きなさい」

「ふぁーい」

今朝はまだ一度も起きた記憶はないのに、と思いつつ、ナギは目を擦りながら身を起こす。

カーテンの開け放たれた窓から、溢れるように白光が差し込んでいる。今日もいい天気だった。

眠い目をこすりながら食卓につき、100%のオレンジジュースを一口飲んだところではたと気づく。

「ん、そういえばハヤテはどうした?」

いつもナギが食堂に入ると、爽やかな笑顔で出迎えてくれるナギ一番の執事が、今朝はどこにもその姿を見せない。

「ふふ、珍しくお寝坊さんみたいですよ。まあたまにはいいんじゃないですか。た・ま・に・は」

「……なぜそこを強調する」

ナギはぼつが悪そうにクロワッサンを千切って口に運ぶ。

しかし、確かに珍しいことだった。

前日に馬車馬のように働いてもダンプカーに引かれても宇宙人に攫われても新人類を謳う者たちと未来を賭けて戦おうとも、翌朝にはけろっとした顔をして執事の仕事をこなすあのハヤテが。

「……そんなことありましたっけ？」

「ハヤテならそのくらいのイベントも難なくクリアしていそうだからな」

言いつつ、ナギはみじん切りの玉ねぎとにんじん、ベーコンが浮かぶスープを一口。

その時、食堂のドアの向こうから人の歩く気配がした。

「あ、ハヤテくん起きてきたみたいですね」

「ふっふーん、今日は私のほうが早起きだったからな。威張りたおしてやる」

鼻を鳴らすナギに、マリアは苦笑を浮かべる。

そして、食堂のドアがぎい、と力無く開いた。

ちんまり。

「遅いぞハヤテー。……うん？　なんだ今一瞬入った妙なオノマトペは？」

「な……、ナギ！　見てください！　あ、あれ……！」

のんきにスープをすすり続けるナギに対して、マリアは青い顔をして震える手で入り口の方を指差している。

「んー、ハヤテがいったいどうしたというのだ、って、うええええええっつっ！？」

わなわなと体を震わせるマリアの指差す先。そこには。

扉の取っ手より頭一つ低い背丈。低い鼻にくりつとした瞳があどけない顔立ち。

大人用パジャマの裾や袖を歌舞伎役者のように引きずりながら現れた、その7歳くらいの幼児は、しかしどこからどう見ても三千院家の執事、綾崎ハヤテだった。

「おはようございます、ナギおじよーさま、マリアさん……」

『はやてのごとく!』

「……」

「……」

「……んゝっ」

猫のように眠け眼をこしこし擦る幼児ハヤテを前にして、ナギもマリアもすっかり開いた口が塞がらず、時が止まったかのように硬直していた。

「……お二人とも、どーしたんですか？ あ、ボク寝坊しちゃいましたねスミマセン」

現状とすっかり的外れのハヤテの一言を皮切りに、我に返った二人は一斉にまくしたてる。

「そんなことはどうでもいいわあああああっつ!! どおうしたというのだハヤテ、その……、年齢はっ!!」

「へ？ 年齢？」

「やはりあれでしょうか？ 黒の組織？ アポト○シン4869を飲まされ体が縮んだんでしょうか？」

「うむ、もしくは私たちは全員催眠能力（ヒュプノ）にかけられている可能性があるな！ くっそう、京介のヤツ！」

「もしくは重機人間として復活させられたのかも知れません。ハヤテくん、頭にボルトがついてたりしませんか……？」

「惜しくも1巻で完結した作品を出してくるとはマリアにしてはやるな！ となると、逆玉手箱で時間を戻されたと言う可能性も出てくるな！」

「え、ハヤテくん妖狐になっちゃうんですか？ やーんどうしましよ！」

「お二人とも、おちついてください……。いろんな意味でなにを言っているのかわからないんですけれども……？」

すっかり興奮した様子の二人をハヤテはなだめる。

そんなハヤテに、二人はついといと食器棚のガラス戸を指差す。

「か……、かわいい……っ！」

「わぴっ!?　ちょ、おじよーさまっ……!?!」

辛抱たまらんとばかりに、ナギは自分より一回り小さくなったハヤテを思いつき抱きしめる。

「く、くるしいです、おじよーさま……!」

「ダメだぞハヤテ!　こんな、こんな愛らしさは反則だ!　ぎゅうううう!」

主人の愛溢れすぎる抱擁からハヤテも必死に抜け出そうとするが、今の体格では力もロクに入らないようだった。やがてハヤテの腕の力が抜け、ぷらりと……。

「こらナギ!　放しなさい!　もう、なんてはしたない……」

見かねた、というより我に返ったマリアが強引にハヤテを引き剥がす。

息を吹き返したハヤテに、しゃがみこんで大丈夫ですか、と声をかけるマリアに、ハヤテは光を放つような天真爛漫の笑顔で答える。

「あ、はい、ありがとうございます、マリアさん」
「ばっちーん。」

「ああああ、もう!　ダメですよハヤテくーんっ!　ぎゅーっ!」

「わぷ、むあ、マリアさ、む、むね、んむー!」

「こらーマリア!　変なスイッチ入ってるぞ!　ハヤテを放せー!」
「!」

「はあ、はあ……。おふたりとも、おちつきましたか……」

「ええ、まあ」

「なんとか……」

反省の顔を浮かべながら、ナギとマリアは足をぷらぷらさせて椅子に腰かけるハヤテに謝る。

「しかし、これからボクはどうすればいいんでしょう?」

「うむ。いくらユル系コメディ漫画のパロSSだからって、いきなりこんなことになるとはな……」

「……どこかで聞いたようなセリフですね」

「ハヤテくんはヴァンパイアの血を飲んでもらうというのはどうでしょう？」

「むう、こうして考えると、サンデーはこの類のネタが多いな。惜しくも打ち切りになってしまったが、私は好きだったぞ」

「おじよーさま、また話が脱線してますから……。僕も好きでしたけど」

「私はクナイくんの生足が……。コホン。とにかく、原因がわからない以上、ひとまず様子を見るしかないですね」

「様子見、か」

マリアの提案に、ナギはまあ仕方ないかと言わんばかりに腕を組む。

「ええ、ひとまずハヤテ君には普段どおりに生活してもらいます。その間に私が解決策を調べてみますから。……。何から調べればいいのかさっぱりですけど」

「え、普段どおりってことは、学校も、ですか？」
ハヤテは思わず声を上げる。

「当然です。体は健康なんですから、お休みなんて許しません。私だって、10歳で白皇に通っていたんですよ？」

「いや、それとこれとは」

はなしがちがいます、という二の句はマリアの一瞥によって阻止された。

「でも服がありませんよ。見ての通りパジャマだってぶかぶかだし、執事服だって……」

「そおんなこともあろうかと綾崎ハヤテえ！」

「うわっ!？」

バーンと扉を開け放ち、くると前転宙返りをしながら現れたのは、

「この執事長クラウド、貴様のためにこのぐぼああっ!?」
堂々と名を挙げた老紳士の左頬に、鉄の砲丸が炸裂した。

「うるさいぞクラウド……、ハヤテがこんなに脅えているではないか……」

「スミマセンお嬢様……」

足元にすがり寄るハヤテをよしよしとなだめつつ、ナギは続ける。

「で、何がそんなこともあったのだクラウド」

「ふふ、まあこちらをご覧くださいお嬢様」

「なっ、それは!」

不敵な笑いを浮かべながらクラウドが掲げて見せたのは、普段どおりのハヤテの執事服、しかしサイズは二周りほど小さいものだった。

「お前……、こんなもののいつの間に」

「『いつの間に』? ふふ、愚問ですぞお嬢様。この執事を超えた超執事、クラウドの手にかかれば今朝の騒ぎを聞きつけてから、採寸裁断縫製仕立てまでこなすことなど造作もないこと。それが三千年家クオリティ。ちなみに一万人のゼロスーツを仕立てあげたのもこの私。さあお嬢様、遠慮は要りませんぞ。どうぞこのクラウドに惜しめない賞賛を」

「ありがと! よしハヤテ! これで学校に行けるな! さっさと行くぞ!」

「え、おじょーさま、まだボク着替えて」

「そんなもの私が着せてやる! ほらほらいくぞ!」

「わっ、それくらい自分で着れま、うわああああっ……」

ハヤテを引きずり、ナギはつむじ風を上げてぴゅーっと食堂から出て行ってしまった。

一人呆然と立ち尽くす超執事。

「……」

「……あ、く、クラウドさん。一万人のスーツの話、詳しく聞きたいですわー、なんて。大丈夫でした? 口封じとか……」

「……マリアよ」

「は、はい？」

「聞いたか、お嬢様が今、『ありがとう』と……。この私に……。ううっ」

「……まあ、クラウドさんがそれでいいのでしたら」

目の前には、ハンガーにかかった小さいけれど立派な執事服。

「……懐かしいな」

「んー、何か言ったかハヤテ？ さつと着替えないと本当に手伝っちゃうぞ」

「いえ、なんでもありません！」

「よし、バッチリだな！ では行くぞハヤテ！」

「はい……。なんかおじょーさま、やたらテンション高いですね……」

測ったようにピッタリなミニ執事スーツを身にまとい、教科書類を詰めたランドセル（これはクラウドは用意していなかったはずだが、どこから用意したのやら）を背負ってハヤテはナギとともに玄関に並び立った。

「ああ、子供が進級したときのお母さんってこんな気持ちなのかしら……」

「い、いつてきます……」

「車に気をつけるんですよー」

後ろから、やたら母性を帯びた視線を感じながら、ハヤテは屋敷を出る。

「今日は私がお姉さんだからな、しっかり守ってやるぞハヤテ……。ん？」

スタスタと軽快な足取りのナギはふと足を止める。数歩後ろから、パタパタと早足で追いつがってくるハヤテ。

「はあ、はあ……。な、なんですか、おじよーさま」

「んふ☆」

ナギはめいっぱい口を吊り上げてにんまりと笑うと、ハヤテの紅葉のような小さな手をきゅっと握る。

「べ、べつにこんなことしていただかなくてもっ」

「顔が赤いぞーハヤテ？ あははははっ」

「むう……」

ナギに手を引かれながら、顔を赤くしてハヤテは通学路を歩く。

いつもと角度の違う景色。

そして前を歩くナギの、自分よりも大きな背中。

なにもかもが新鮮な景色に、こんな状況だというのにハヤテは少し吹き出してしまった。

「ん？ どうしたハヤテ？」

「いえ、なんでもありません！」

笑顔で尋ねるナギに、笑顔で答える。

今日は一日、頼りにしてます。そう心で呟いて、不安の待ち受ける白皇学院へと向かうハヤテであった。

「帰ってきたら、ハヤテ君には、何を着てもらおうかしら♪
うふふふふふふ♪」

後半へと続く！

『はてのごとく!』前編(後書き)

試行錯誤中。後編はすぐに更新します。楽しんでいただけた方はぜひ感想をば。

『はてのどく!』後編 (前書き)

ヒナギクさんごめんなさい (先に謝った)

『はやてのゝとく!』後編

二人が到着した途端、予想通り白皇学院は大騒ぎとなった。

「こっ、こっ、こっ、これがハヤ太くーん!!!??」

「理沙アツツ!!」

「応っ!!」

美希の掛け声とともに、後ろからビデオカメラを手にした理沙が飛び掛ってくる。

「はっ! うおお、反応反射音速光速! 反応反射音速光速!」

「こっ、これは、高速で運動するリサちゃんがドーム状にハヤ太くんを取り囲んでいるわっ!」

「これぞ朝風家秘伝、被写体を左右360度上下180度、あらゆる角度から余すことなく撮影する奥義『活撮自在陣』! 私も見るのは初めてだわ……ごくり」

「ふはははは、どうだあハヤ太君! とくと味わえこの、おえ、ちよっと酔ってきた……」

「あれ、ぜったい映像ブレてますよね」

「んー、まあバカだから放っておけばいいんじゃないか?」

ナギがあきれてつつこむのを待たずして、理沙はストールを起こした飛行機のようにどさりと床に落ちた。

「で、どうしてこんなことに? ハヤ太君」

後ろでエチケツト袋を抱える理沙と、その背中をさする美希を尻目に、泉は質問を続ける。

「はあ、じぶんでも何がなんだか……」

「ふーん、でも可愛いからいいんじゃない?」

「いや、そんな一言でかたづけられても……」

既にこの状況を受け入れたようで、泉は屈託の無いいつものニコニコ笑顔を浮かべている。

「でさ、ハヤ太君。というよりナギちゃん」

「んー？」

「なんでハヤ太君を自分の席、というか自分の膝の上に乗せたままなのかな？」

「あ、それはボクもさっきからずっと言いたかったんですが」

ナギは自分の席に着こうとするハヤテを引っつかみ、自分の上に鎮座させ背中をすっぽり抱き包んでいた。

「やらんぞ」

「おじょーさまにもらわれた憶えはありません！」

「えー、次の休み時間にちよつとだけー」

「泉さんも！」

そんなやり取りをしている後ろで、教室の扉を開く音。

「もう、隣の教室が騒がしいって苦情が来てるわよ、一体何を騒いで、……っっ！？」

眉に皺を寄せて、生徒会長桂ヒナギクが教室に入ってきた。

しかし、ナギの胸元でひょっこり顔を出すその生き物を見た瞬間に、雷に打たれたかのようにその場に硬直した。

「あの……、ヒナギクさん？」

「……………」

「なにやら金魚のように口がパクパクしているな」

「ちよつと私聞いてくるね」

泉がてとてと近づいてきてもまったく気づかず、ヒナギクの視線は幼きハヤテにしっかりと固定されていた。

「ほお、ほお、ふむ、なるほどー」

泉が戻ってくる。

「何か言っていましたか？」

「えっとね、『ありえないありえないわありえないくらい可愛いわ』と言うより小さいわハヤテ君？ ハヤテ君よね？ いやいや何を言っているのヒナギクハヤテ君は高校生よということはあれは夢？」

幻？ 幻なら抱きしめても合法よねよし抱きしめよういやダメよそんな倫理に悖（もと）る事はああでも本能が呼びかけてくるワカセヲハズセオリヲコワセ』……だって」

「今のお前の威力はヒナギクすら破壊可能なようだなハヤテ」
「正氣に戻ってくださいヒナギクさあん……」

その時、石のように固まっていたヒナギクがゆらりと動き始めた。
「ち、近づいてくるぞ！」

「ちよっ、おじょーさま離してください！ 目が、ヒナギクさんの目が狩人のそれに！」

重い足取りでハヤテたちの目の前に立ったヒナギクは、石の巨人のように重々しく口を開いた。

「ハ、ハヤテ君。駄目よ、もう授業が始まるんだから。自分の席に着かないと」

「へ？ は、はい」

きょとんとしながら、ハヤテはナギの膝から離れ、すたすたと自分の席に戻る。

「ハヤテの異変にはノータッチだったな……」

「おそらく、あえてむりやり平然と振る舞うことで、自らの精神を保つようにしたんだろう。ヒナなりの、悲しい自衛手段だったんだな……」

「おえええ……」

「おらー、さっさと席に着きなさい社会の憂し悲しを知る前のモラトリアムを貪る若人どもー」

摺れたセリフを吐きながら、担任の桂雪路が入ってきた。

ハヤテの周りに群がっていたギャラリーも蜘蛛の子を散らすようにそれぞれの席に戻る。

「はーい、じゃあ出席を取るわよー。綾崎ハヤテー」

「は、はい」

「んー？ ……………、じゃあ次ー」

「ちょっと待った雪路！ このハヤ太君に対してツツコミは無しか！」

「べっつにー。もう今私、二日酔いでそれどころじゃないのよー。何か視界もおぼつかないしさー。綾崎君がどうかしたのー？」

「もう駄目だこの教師」

◇ ◇ ◇

続いて、世界史の時間。

「じゃあ教科書に載ってないところで問題出すわよー。何人か当てるから、黒板に答えを書くように」

ええー、と教室内からブーイングが出る。あーもう頭痛に響く、としかめ面をして雪路は続ける。

「先週ちゃんと教えたところでしょーが。えーと、じゃあ1番目を綾崎君」

「あ、はい！」

指名されて、ハヤテは教壇に向かう。

「うっわ！ なにこれ綾崎君小っさ！」

「だからさっきから言ってるだろうに」

「何ー？ どこに行ったらそんな若返りのお薬もらえるの？ おいくら万円？」

「ははは……。えーと1番、よつと」

答えを書こうと、ハヤテは必死に手を伸ばす。

……が、解答欄はその遥か上。ハヤテから見ると、傾斜90度の崖を仰ぎ見るが如しだった。

「えーと、桂先生？」

「んー？ 早く書きなさいよ」

「えっと、えっと、すみません、何か台のようなものを……」

「もー、まったくしょうがないわねー」

なぜか慥然とした態度で、雪路は自分の座る椅子を差し出す。

「すみません、失礼します……うんしょ。ん……っ……」

ふらふらとバランス悪く椅子の上に立ち、ハヤテはもう一度目いっばい背を伸ばす。

しかし、目的の位置には届かない。

「くっ、ん……っ、はあ、はあ、ん……っ。……ぐすっ」
「……いじましいわあ」

ついに目じりに涙を浮かべ始めたハヤテの様を見て、雪路はにんまりと笑みを浮かべる。

「もう、お姉ちゃん！ 可愛そうでしょ！」

バンと机を叩いて、ヒナギクは教壇に詰め寄って抗議する。

「いや、こんなに小っこくてかわいいとき、ついイジリたくなっちゃうとかイジメたくなっちゃうとか」

「もう！ ハヤテ君、大丈夫？ 他の問題に変えてもらおう？」

「いえ、いいんですヒナギクさん……。……あの、どうして目を合わせてくれないんですか？」

「え、いや、その、ちょっとそれは無理というか、合わせたら自分でもどうなっちゃうかわかんないとか……。……」

不自然に首をぐぐと曲げながら、不自然な体勢でヒナギクはハヤテの肩に手を置いてなだめる。

「あ、そうだヒナギクさん。おねがいがあるんですけど」
「へ？」

「あ、これなら届きますヒナギクさん！ ありがとうございます！」
「ど、どういたしまして……」

ハヤテの思いついた案は、ヒナギクがハヤテの脇を抱えて持ち上げるといふ実にストレートなものだった。

ヒナギクの目の前には、小さなハヤテの小さな背中。

ぶらりと下がった足は、ハヤテのうんしょうんしょという声に合わせてぶらぶらと揺れている。

「軽い……、ちっちゃい……、か、かわいい……」

「だいじょうぶですかヒナギクさん？　なんか腕がプルプルしてま
すけどやっぱり重かったですか？」

「いつ、いいえ、そんなことはなないわよ！　でも、できれば早
くしてほしい、かも、こう、理性とか残っているうちに」

「？　はい！　がんばります！」

ヒナギクが必死に母性本能とバトルしているのも知らず、ハヤテ
はマイペースにチョークを走らせる。

「ヒナちゃん、いま自分がものすごく面白い顔をみんなに晒してい
るのに気づいているかな？」

「まあ当然記録媒体にはしっかり残しておき、あとで話の肴にしよ
う」

（にしても、子供ってあったかいのね……、こんなに細くて柔らか
い体なのに、必死に動いてるんだわ……、なんていうか、愛しい……、
ああ駄目よ私……）

「あの、ヒナギクさん、ヒナギクさん？」

「ふ、ふえ？」

「答え書けたんですけど……、合ってますか？」

我に返り、ハヤテの書いた解答を見る。どんな問題だったか忘れ
てしまったが、もうどうでもいいやという気分だ。

「合ってるんじゃないかしら、うん……」

「ホントですか！？　やった、ありがとうございますっ」

振り向くハヤテは、満面に笑みを浮かべる。抜けるような笑顔と
はまさにこのことだと言わんばかりの、純真天然爛漫スマイル。

それはヒナギクにとってハンマーで直接脳を殴られたような衝撃
を与え。

ヒナギクの理性は完全に破壊され、沈黙した。

「ハヤテくううううんっ！　もおダメよこのこの子はああ

あっつ!!!♪」

笑顔と興奮を撒き散らしながら、ヒナギクはハヤテを潰れそうなほど抱きしめて、その場でくるくると踊り始めた。

それはもうアルムの森の木の下に広がるお花畑が目に見えくらいいい。

「むぎゅっ!!!? ヒ、ヒナギ、ぐむ、むうううう!!!?」

「かーわいー♪ ハヤテ君かーわいー♪ このほっぺとかもう国家犯罪級だわ、うりうり〜!」

「うわー! ヒナちゃんが萌え狂ったあ!」

「いかん、ただでさえ最強の生徒会長だ、こうなったヒナは誰にも止められない! なんとかしろ雪路!」

「私、正直嬉しいわ……。ほら、ヒナっていつも生真面目でさ、もつと、ホンネの自分って言うの? さらに出していてもいいんじゃないかな、って」

「実は影ながら見守り続けていました的な姉キャラ設定に浸っている場合じゃない! ハヤ太君が窒息してしまうぞ!」

「ヒナギクうう! ハヤテを放せええ!! もしくは私に替われええっ!!!」

「な、そんなこと、言ってるばあいじゃ、おじよ、ぐむ、ああ、刻が見え……」

「まったく、予想以上に大騒ぎになってしまったな」

放課後。なんだかんだとすったもんだで事態は収拾し、物珍しさの野次馬もやっとまばらになっていた。

「いや、ある意味もつと大事になっていてもおかしくなくとおもうんですが……。そういえばヒナギクさんはどうしたんです? ボクはあのあとしばらくラ〇アに会いにいったんで知らないんですが」

「三千院家御用達の黄色い救急車で運ばれていった。治療には数日

かかるそうだ。最後に桂先生が聞いた言葉は『シヨタが嫌いな女子なんていません!』だったのかなんとか」

「……ボク、ヒナギクさんの経歴にとんでもない傷つけちゃいましたね」

決して悪いことをしたわけではないのだが、ハヤテはしゅんと反省する。

「可愛さは罪、というやつだな。……はっ、今のハヤテに、フリフリの、ヒラヒラの、かわいらしい女の子の服を着せたら……」

「お、おじょーさま? なんかがまがしくも桃色なオーラを放せられています……」

「よし、早く帰るぞ今すぐ帰るぞハヤテ! お楽しみはこれからだー!」

「つて、うわー! ちょっと、おじょーさまー!?!」

ハヤテの腕を引っつかむと、初速からエンジン全開でナギは廊下を駆け抜けていった。

素早い動きで靴を履き替え、たったかと軽快な足取りで校門をくぐり抜ける。

「でもこれ……、いつになったら直るんでしょうか?」

「なんだ、まだ気にしているのか? 確かにいろいろ大変かもしれないが、マリアもいるし、みんなにはモテモテだし、何より私がついてるではないか! 安心しろ!」

「確かに、それは嬉しいんですけど、でも……」

ナギの小脇に抱えられたハヤテは、それでも釈然としないものがあった。

なにか、もっと大事なことが、このままでいてはいけないという何かが……。

「うわっ」

その時、ドンという音とともに視界がぐらっと揺れたかと思うと、地面にべたっと叩き落とされた。

「くっ、大丈夫かハヤテ！」

どうやらナギが転んだようだった。ちかちかする視界がゆっくり正常に戻ると、目の前には。

「あー、んだこのジャリども？ 前見て歩けねえのか？」

モヒカン、スキン、ドレッドと様々なパターンを網羅した頭の、いかつい3人組が立ち並んでいた。

「う、うわーお……」

「おい、聞いてんのかよ金パツ嬢ちゃんよ？ 人にぶつかっておいでごめんの一言も無しっつーのはどういうつもりだって聞いてんだ、あ？」

「うるさい黙れこのばらんども」

「ああ？」

「ちょっ、おじょーさま！？」

「確かにぶつかったことは謝ろう。しかし、往来の歩道でアホ面並べて人の行き来を塞いでいたのはこのアホだ？ ちなみにばらんって何かわかるかアホ共？ 弁当に入っている笹の葉を模したアレだ。某桂馬くんはお前らのような雑人を指してパセリなどと称していたが、お前らクラスになると煮ても焼いても食えない。だからばらんだ。せいぜいエビのしっぽとともに廃棄されるがいい」

「て、テメエ、べらべらとよくも！」

「ふん、なんだ反論できるボキヤもないからすぐに暴力か？ まあよい、おおいハヤテ！ こいつらに目にももの見せてやれ！」

「あのー、おじょーさま？」

「む、どうしたというんだハヤ、あああしまったあっ！？」

振り向きざま、ナギはとんでもない失態に気づく。ナギの後ろにいる頼れる執事は、今はいつもの半分以下の小ささだった。

「おじょーさま、そうやってすぐタンカ切るクセ何とかしてください……」

「あうう……」

「どうした？　その後ろのハナタレ坊主が相手してくれるってのか？」

口にした後、げっへっへと下卑た笑いを浮かべる3人組。

くっ、とハヤテは唇を噛み締めると、力強く足を踏み出し、ナギの前へと立ちふさがった。

「……そのとおりだ！」

「あ？」

「は、ハヤテ？」

「おじよーさまを傷つけようとするやつは……、このあやさきハヤテが許しません！！！」

高らかに言い放つハヤテ。それに遅れて、男たちの笑いが大きな高笑いへと変わる。

「あーはっはっは！！　あー面白え！　許さないってかこの、ガキい！！！」

「ぐあああっつ！」

笑いが止まったと思った瞬間、男たちの1人がサッカーボールを蹴り上げるようなキックをハヤテに見舞う。

とっさに腕で防ぐが、体重の差も力の差も違いすぎる。

それこそボールのようにハヤテの体は宙を舞った。

「ハ、ハヤテーっ！！　お前、よくも……！」

「はっ、あんなガキに守られようとしてよく言うぜ、このナマガキがよお！」

すっかり頭に血の上った男はナギの胸ぐらを掴み挙げる。自分の身長よりも高く吊り下げられるナギ。

「くっ、放せっ、ハヤテ、ハヤテえ！」

ナギの目には、恐怖と後悔で涙が浮かんでいる。

数メートル向こうから聞こえる悲痛な叫びにそれを感じ取ったハヤテは、何とか立ち上がろうとする。

が、蹴りを喰らった胴体、叩きつけられた背中から鈍く押し掛か

ってくるような痛みで膝に力が入らない。

あまりにも無力な体。不甲斐ない自分を呪う。

同時に、フラッシュバックする記憶。

そう、今のうちに体が小さかった頃、手に入れた幸せ。

そして、それを守れなかった自分。

あの頃の無力な自分を二度と味合わないために、強くなろうと決めたんだ。

「そうだ……、だから僕は……」

「くそっ、ハヤテ、大丈夫か、ごめん、ごめんな……」

「謝るのはこっちにだろこの……」

[illegible]

「っ、な、なんだこのプレッシャーは、！？」

夕日を背に立つ少年の目は燦然と輝き、火山口から沸き立つ高温の蒸気にも似たオーラが彼を中心に渦巻く。

こおおお、と腹の奥へと気を溜め込むような深い呼吸音。

「は、ハヤテ？」

「な、なんだってんだこのガ」

「はああああああ……、あああああああつっ！っ！！！」

咆哮一閃、体の中の氣力を解放したハヤテの体は加速度的に膨張を始めた。

筋肉が隆起し、骨格が驚異的な新陳代謝を繰り返し、スモールサイズの執事服は、膨れ、張り詰め、弾け飛んだ。

おまけに、露わになった上半身には7つの傷が見えたとか見えな
いとか。

「ハヤテ！」

「ば、ばばば、化け物！」

満面の笑みを浮かべる少女とは対照的に、目の前の奇怪な光景に一言そう漏らすしかない不良たち。

完全に元の姿に、いや、前より大幅にマッシブになったハヤテは、ずしんと重い足音を響かせながらナギの元へと歩み寄る。

目は完全に狩猟動物のそれ。全身の血管は沸き立ち、筋肉はまるで岩のよう。

あと、錯覚だと思いたいところだが、心なしが全身が赤く発光していた。

「ほ、北斗だなハヤテ！」

「……聞こえませんでした？」

「あ、ななな、何が？」

「その手を……、放せてんですよおおおおおあたあああっつ……！」

「「へぶちっ!!」」

ダンスを舞うように、パンチ、キック、手刀を続けさまに3人組に放つハヤテ。哀れ不良たちは、夕日の彼方へと飛び消えた。

「ふっ、雑魚が」

軽く鼻をならすハヤテの目は、菩薩のような静けさを湛えていた。

「ハヤテ、元に戻ったんだな！」

「ええ、お嬢様のおかげで！」

「いや、私はなにも……、すまなかった。かしなんだ、前より男らしく……っ」

「? お嬢様どうしました？」

ハヤテがナギのほうに向き直ったとたん、彼女の動きがぴたりと止まる。

同時に、温度計が急上昇するように顔が真っ赤に変わっていく。

「お、大人……」

「へ? あ、ああああっ!!」

3秒ほど遅れて気づくハヤテは、慌てて身を縮める。

そう、執事服は、弾け飛んだのだ。

「ハヤテくん、ナギー、やっと見つけましたよ白乾児（パイカル）……、あら？」

「ハヤテの……、破廉恥馬鹿あああああああああああ
つつっ！！」

「ぐあああああつつっ！！」

愛沢家御用達の巨大ハリセンの一撃をくらい、ハヤテは更け始めた空の4つ目の星となった。

「まったく、ハヤテはほんとにまったく！」

「まあ、結局はこんなオチだろうと思いましたが……、とりあえず一件落着ですわね。今日はこれで一杯やることにしましょうか、うふふ」

「で、今回のこれは結局何が原因やったんや伊澄さん？」

「……まあ愛の力で解決したんだからいいじゃない」

「そこは投げっぱなしなんや……」

—END—

『はやてのごとく!』後編 (後書き)

今思えば、なんでこんなネタを思いついたんだっけ……。

あ、書き手本人にそういう趣味はないのであしからず。ほ、ホントだよ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1952g/>

ハヤテのごとく！SS『はやてのごとく！』

2010年10月8日10時37分発行